

曹植「雜詩六首」論考

後 藤 秋 正

鍾嶸がその「詩品」の中で、「其源出于國風、骨氣奇高、詞采華茂、情兼雅怨、體被文質、粲溢今古、卓爾不羣。」と最大級の評價を與えた曹植（一九二～二三二）の「雜詩六首」（文選卷二十九所載）をとり上げ、それが彼の文學活動の中でどのような位置を占めるのかを考察し、それを通じて、その文學的到達點をも追求してみたいと思う。

雜詩というスタイルは、もちろん曹植の獨創になるものではない。「文選」所載の王粲の「雜詩」に李善は注している。雜者、不拘流例、遇物即言。故云雜也。つまり、思い浮んだ感懷を從來のしきたりにとらわれずに「即言」した詩は、みな「雜」ということになる。^{注(1)}

曹植と同時代の詩人も、多く雜詩と題されるものを残している。「文選」に載せるものだけでも、王粲の「雜詩」一首、劉楨の「雜詩」一首、曹丕の「雜詩」二首が数えられ、その他にも、阮瑀の「雜詩」二首、闕文ではあるが繁欽の「雜詩」も存在する。いずれも「徘徊不能去、佇立望爾形」王粲、「攬衣起躑躅、上觀心與房」阮瑀、「展轉不能寐、披衣起彷徨」曹丕、の如く、満たされぬ自己の感懷を述べるもので、用語なども似かようなものも少なくない身邊抒情詩である。その點では、曹植の「雜詩六首」の一部分とも通じ合う性格を持つ。

さて、曹植の「雜詩六首」であるが、まずその制作年代には確定した説はない。李善注には「在鄴城思鄉而作」とあり、そうであるとすれば、黄初三、四年の作だということになるが、これから内容をみていく中でも理解されるように、

六首の扱う主題はかなり異なつていて、鄆城で全部が作られたとは考えにくい。従つて黄初三、四年から、太和六年の死に至るまで、徐々に作られたとするのが妥當であらう。これについては後述するが、古直は、△其一▽を黄初四年、△其二▽△其三▽を太和年間、△其五▽△其六▽を太和二年の作と推定し、黄節は、△其一▽を雍丘に封ぜられる（黄初四年）以前、△其二▽△其三▽△其四▽△其五▽を雍丘に封ぜられた後、△其六▽のみ建安十九年の作としている。時に黄初四年といへば、正月、洛陽に朝し、七月、歸國にあたつて曹彪と同道を許されず、又兄曹彰が急死しており、何かと不安な事のあつた年で、彼自身も罪を得て安郷侯に貶せられた（黄初二年）後であり、一つの轉期になつた年である。

そこで、まず△其一▽から検討していく。

高臺多悲風 朝日照北林 高臺 悲風多く 朝日北林を照らす

之子在萬里 江湖迴且深 之子 萬里に在り 江湖迴かに且つ深し

方舟安可極 離思故難任 方舟安んぞ極む可けんや 離思故より任へ難し

孤鴈飛南遊 過庭長哀吟 孤鴈飛びて南に遊び 庭を過ぎりて長く哀吟す

翹思慕遠人 願欲託遺音 思ひを翹げて遠人を慕ひ 願はくは遺音を託せんと欲す

この詩の「之子」「遠人」という語を、京師に朝した際、歸路を同じくすることのできなかつた異母弟曹彪と解釋するものがある（古直など）。確かに曹彪との悲劇的な別離をふまえているとするのは、「江湖迴且深」とか「孤鴈飛南遊」という句から考えられないこともないが、これらの句は曹植の獨創になるものではなく、例えば「古詩十九首」△其一▽に「道路阻且長、△其六▽に「所思在遠道」などの句があるように、當時に至るまでよく使用された表現であり、特定的人物として解する必要は全くない。^{注②}この詩の特徴は、事實を踏まえているということを排除して、その離別の悲哀が、特定の讀者を想定したものでない普遍性をもつ點にある。事實説明的な句を拒否して、早く「文鏡秘府論」南卷論文意に、與の技法であると指摘されるように、^{注③}冒頭から「悲風」「北林」という暗いイメージを暗示する抽象的な響きをもつ語を使

用していることからそれは明らかである。曹植は特定の對象を意識させようとする意圖はなかつたのである。ただつけ加えれば、一首の内容を冒頭で暗示するという技法は、彼のみにあるのではなく、例え（註）ば徐幹の「情詩」にも「高殿鬱崇崇、廣厦淒淒」といつた起句があり、その詩も別離の情を歌う。この曹植の作は離別の耐え難いことをいつて、それから脱しようとする意志はみられないが、彼が他の諸王族に比べて、ことに朝廷からの壓迫が強く、その孤獨の情、親しき人を思う氣持は、かなり痛切なものであつたろうことを考え合わせると、悲哀を深く感じながらも、生の感情を再構成して緻密に描寫しようとする態度がみられるのである。「贈白馬王彪」「朔風」「雜詩（攬衣出中閨）」等、別離を悲しむ彼の詩は多いが、その起句により情況を設定してのち、累層的に悲哀を盛り上げ、終句で感情を締めくくるという構成をとつても、この詩は一つの典形をなすものである。

△其二▽は遠征に従う兵士に託して自己の憂愁をうたうものである。

轉蓬離本根 飄飄隨長風 轉蓬 本根を離れ 飄飄として長風に隨ふ

何意迴飄舉 吹我入雲中 何の意ぞ迴飄の舉りて 我を吹きて雲中に入らしむるは

高高上無極 天路安可窮 高々と上がりて極り無く 天路安んぞ窮む可けんや

類此遊客子 捐軀遠從戎 此れに類たり遊客の子の 軀を捐てて遠く戎に従ひ

毛褐不掩形 薇蕨常不充 毛褐形を掩はず 薇蕨常に充たざるは

去去莫復道 沈憂令人老 去り去りて復た道ふ莫かれ、沈憂人をして老いしむ

この詩は、太和年間の境遇を知るに足る「遷都賦序」の「號則六易、居實三遷。連遇瘠土、衣食不繼。」の語から考えてほぼ太和年間の作と推定してよい。また一篇の内容は、太和三年頃の作と考えられる「吁嗟篇」と極似し、そこでも彼は自己を、

吁嗟此轉蓬 居世何獨然 吁あ蓬此の轉蓬 世に居ること何ぞ獨り然る

と轉びゆく蓬にたとえ、また、

卒遇回風起 吹我入雲間 卒に回風の起るに遇ひ 我を吹きて雲間に入れり
とこの詩と同様の技巧を使用する。(ただ悲哀の調子は「吁嗟篇」の方が激越であるが、凝縮度はこの詩がまさる。)そして、「黃初六年令」の「身輕於鴻毛、而謗重於太山。」という罪を得た後の境地であることも考えれば、文字通り轉蓬に擬せられる状況であつたのである。次にこの詩のもつ特色を述べるのだが、敘述の都合上、少しく彼の詩風の變化について觸れておく。

詩風の變化は、その「贈丁儀」「贈王粲」「贈徐幹」「贈丁廙」「贈白馬王彪」などの一連の贈答詩中にもみられるのであるが、ここでは、人民大衆の生活を對象とした詩句にみられるものについて述べる。その詩句は以下の如くである。

黍稷委疇隴 農夫安所獲 黍稷 疇隴に委てられ 農夫安んぞ獲る所あらん
在貴多忘賤 爲恩誰能博 貴に在りては多く賤を忘る 恩を爲すこと誰か能く博からん 「贈丁儀」

側足無行徑 荒疇不復田 足を側つるに行徑無く 荒疇復た田せず 「送應氏」

天覆何彌廣 苞育此羣生 天の覆ふ何ぞ彌く廣くして 此の羣生を苞育するや
棄之必憔悴 惠之則滋榮 之を棄てなば必らず憔悴し 之を恵みなば則ち滋榮す
慶雲從北來 鬱述西南征 慶雲北より來り 鬱述として西南に征く
時雨中夜降 長雷周我庭 時雨 中夜に降り 長雷我が庭を周る
嘉種盈膏壤 登秋畢有成 嘉種 膏壤に盈ち 登秋畢て成る有り 「喜雨」

八方各異氣 千里殊風雨 八方各々氣を異にし 千里風雨を殊にす

劇哉邊海民 寄身於草野 劇しき哉邊海の民 身を草野に寄す

妻子象禽獸 行止依林阻 妻子は禽獸に象 行止は林阻に依る

柴門何蕭條 狐兔翔我宇 柴門何ぞ蕭條たる 狐兔我が宇に翔る

「喜雨」「泰山梁甫行」は全篇をあげた。前三者については、制作年代が諸説ともほぼ一致している。つまり、「送應氏」

二首と「贈丁儀」はともに建安年間それも建安二十二年以前の作と推定され、「喜雨」は「北堂書鈔」卷百五十六に、「太和二年、大旱、三麥不收、百姓分於饑餓。」とあり、本傳の記載とも符合するところから、太和二年の作と斷定されている。最後の「泰山梁甫行」については、古直は建安年間の作といい、黃節は鄆城王に封ぜられた年（黃初二年）或は東阿王に封ぜられた年（太和二年）と推定している。しかし内容からみるに、少くとも古直の説には根據が乏しい。

さて「送應氏」は、彼が建安十六年、曹操と共に馬超征討に赴く途中、洛陽を通つた時のものである。ここでは洛陽が重なる戦亂で、宮室は焼かれ、知る人間もないという情景が、悲哀を呼び起すものとして述べられ、抜き出した句はその一部分として現れる。耕作ができないという、農民にとつては重大な事實も、應氏との別離の悲しみを際立たせる爲の一つの要素として描寫されるに過ぎず、彼の腦裏を農民の悲惨な生活がよぎることはあつても、それは單なる事實であるだけであつた。次に「贈丁儀」においては、農夫の收穫がないということは、義を尊ぶこの自分が恩恵を施すべき對象として彼に意識されている。つまり、統治階級にいる者が、その政治的恩恵を與えてやるべき存在、完全に對象化された農民の姿がそこにある。結局、この頃の曹植は時代の子であつて、完全に農民大衆の立場に立つてその生活を見つめることは不可能であるにしても、まだまだこれらの詩における農民の描寫は、平板で常識的であるといふことができる。それでは、太和二年の作「喜雨」はどうであらうか。まずこの詩は、明帝の恩澤が各方面に及んでいる様を述べたとする説があるが、太和二年といえは明帝死亡との流言が流され、一部に曹植擁立の動きがあつたといわれる年であり、いくら儀禮的

な作品であると假定しても、全篇にわたつてそのような寄託があるとは考えられない。そこでこの詩は自然の恵みを感謝するものであると素直に理解した方がよい。旱魃が長い期間續いて、人民が憔悴していた時に、恵みの雲が現れ、時雨が降つたのである。末句の「嘉種盈膏壤 登秋畢有成」には、やつと收穫が見込める状態となり、良い種を蒔いてあるのだから、必ずや素晴らしい實りの秋が來ることであろうと、農民と同じように雨を喜んでゐる彼の心境が認められるのではなからうか。もう旱魃という農民にとつての大事をつき離して見ている態度はそこにある。この點、作詩の背景は若干異なるとはいえ、阮瑀の「苦雨」が長雨を自己の悲哀との對比の面からのみとらえているのとよい對照を見せる。最後にあげた「泰山梁甫行」についてはどうであるか。その主題は邊海に住む人民の貧苦の生活、そして自らの寂寞とした生活を述べることにある。邊海を具體的にどの地方とするかによつて諸説に分れるが、この詩で農民生活を激しい調子で描寫することが、決して自らの孤獨さを強調する爲の手段として利用されてはおらず、自らの窮乏から自然と農民に目を注いでいることが理解される。無論、詩數が少ないために、以上のことから輕々しく斷定的な結論を出すわけにはいかないが、まだ朝廷にあつて、父曹操の庇護の下で、才能豊かな部下に圍まれて、恵まれた生活を送つていた建安二十四年ごろまでと失意の生活を餘儀なくされたそれ以後の黃初、太和年間とは、他者を見つめる彼の詩人としての目には、かなりの變化があつたということは指摘できるであらう。

さてこの詩では、以上に述べたことも參考にして、本來統治階級に屬する者としては同化しにくい對象である「遊客の子」の境遇を自分のものとして表現しているのである。彼の詩人としての晩年の成熟の姿の一面が如實に示されているといえる。

△其三▽は、從軍する夫を思う婦人を歌つたものである。

西北有織婦 綺縞何繽紛 西北に織婦有り 綺縞何ぞ繽紛たる
明晨秉機杼 日昃不成文 明晨より機杼を秉るも 日昃れて文を成さず

太息終長夜 悲嘯入青雲 太息して長夜を終へ 悲嘯 青雲に入る

妾身守空閨 良人行從軍 妾身 空閨を守り 良人行きて軍に従ふ

自期三年歸 今已歷九春 自ら三年の歸を期すに 今已に九春を歷たり

飛鳥繞樹翔 噉噉鳴索羣 飛鳥樹を繞りて翔り 噉噉と鳴きて羣を索む

願爲南流景 馳光見我君 願はくは南流の景となり 光を馳せて我が君に見えん

曹植には、この「雜詩六首」中の二篇より他にも、婦人を題材にした佳篇がある。「洛神賦」を別格にしても、「雜詩（攬

衣出中閨）」「棄婦詩」「種葛篇」「浮萍篇」「妾薄命行」二首、「美女篇」「七哀」とその數は多く、「美女篇」「妾薄命行」

△其二▽では、美女の艶麗な様を、美辭を連ねて描寫する。この篇は美女の容姿を描寫するものではない。良人を慕い、

その身を氣づかう婦人の心の強烈さをいうことに主眼はある。このような主題を持つ作品は、彼以外の詩人にも多い。特

にこの詩は「古詩十九首」△其十▽と發想を等しくするところがあり、それは、

織織擢素手 札札弄機杼 織織として素手を擢げ 札札として機杼を弄す

終日不成章 泣涕零如雨 終日章を成さず 泣涕零つること雨の如し

を見れば明らかである。しかし、後半、婦人の口吻を借りて、「願爲南流景 馳光見我君」と、光を効果的に利用するの

は、「九愁賦」に「嗟高飛而莫攀、因流、景而寄言」とあるのと同じく、彼によつて工夫されたと思われる新鮮な響きをも

つ句である。

△其四▽も婦人を歌う詩である。

南國有佳人 容華若桃李 南國に佳人有り 容華桃李の若し

朝遊江北岸 日夕宿湘沚 朝に江北の岸に遊び 日夕れて湘沚に宿る

時俗薄朱顏 誰爲發皓齒 時俗 朱顏を薄んず 誰が爲にか皓齒を發かん

俛仰歲將暮 榮耀難久恃 俛仰すれば歲將に暮れんとす、榮耀久しくは持み難し

總じて、彼の婦人を扱つた篇は政治的志向と關連して説かれることが多い。古直は「其三」について「魏志」本傳を引き「抱利器而無所施」といい、この篇についても「離騷」と重なるところがあるとして、自己の不遇を、佳人の認める人ない様に託したものとする。政治的志向は、曹植の精神の中心的な基礎をなすものであり、それは次の如き表によつても理解される。太和二年の「求自試表」（文選卷三十七所載）にいう。

——略——固夫憂國忘家、捐軀濟難、忠臣之志也。今臣居外非不厚也。而寢不安席、食不遑味、伏以二方未克爲念。——略——
「贈徐幹」「棄婦詩」「薤露行」等の作品に含まれる「慷慨」の語を分析してみると、それが多くの場合、爲政者の一人として政治に參與したいという痛切な願望が遂げられないところからくる憤激の語であることが知られるが、その慷慨の氣は、晩年になり、朝廷から疎外されることによつて徹底的に挫折し、悲慘な生活を経過した後にも、少しも衰えることがないばかりか、いよいよ強烈なものになっている。そして、この雜詩の「其三、四」の篇が、黃初後半に作られたという推定に立つ以上、彼の政治的な志向と關連付けて評價することは、不遇な狀況がどのように彼の詩中にとり込まれていつたかを知る上にも、大變に深い意義をもつ。そして「古詩十九首」との比較からみれば、「古詩十九首」に共通して流れる人生の悲劇性に對する嘆きを、曹植は自己の體驗に引きつけて咀嚼し、獨自の痛烈なイメージのもとに再構成したというものである。發想を同じくする場合にも、感情の燃焼度には格段の差がある。また彼と同時期の詩人と比較してもその表現は、爲政者の一人であるという自負、またその不遇な境地とあいまつて、より緊張度の高いものとなつてゐる。建安年間の作である「美女篇」では、さらびやかな語句で美人を描寫しても主眼は、

佳人慕高義	求賢良獨難	佳人高義を慕ふも	賢を求むるは良に獨り難し
衆人徒嗷嗷	安知彼所觀	衆人は徒らに嗷嗷	安んぞ彼の觀る所を知らんや

と彼の思想を表現することにある。樂府と詩とでは意圖するところが異なるかもしれないが、「文心雕龍」樂府篇で劉勰

が、「子建子衡咸有佳篇、並無詔俗人」と述べていることを考慮すれば、この「雜詩六首」中に象徴的に表われるように、彼は晩年になつて、自己の悲哀を痛切に認識したが故に、對象としてみつめるのではなく、悲哀の感情を共有できるものとして棄婦を歌い、失意の婦人を歌つたのである。くり返せば、△其三、四▽には、そうした彼の周囲を見る目の變化がよみとれるとともに、單に年齢的な圓熟味からくるものとあわせて、政治に參與して手腕を揮いたいという熱望がかなえられないところからくる挫折、朝廷の監視の目は厳しく、豊かでない封地を轉々とする生活環境の惡化を直接的な原因として、その悲哀感を深化させて表現するという、彼の詩人としての到達點が示されているのである。

△其五▽は、仇敵吳國を討たんとする志を述べる。

僕夫早嚴駕 吾將遠行遊 僕夫早に駕を嚴しむ 吾將に遠く行きて遊ばんとす

遠遊欲何之 吳國爲我仇 遠く遊びて何くに之かんと欲する 吳國は我が仇爲り

將騁萬里塗 東路安足由 將に萬里の塗を騁せんとす 東路安んぞ由るに足らん

江介多悲風 淮泗馳急流 江介 悲風多く 淮泗 急流を馳す

願欲一輕濟 惜哉無方舟 願はくは一たび輕く濟らんと欲するも 惜しい哉方舟無し

閑居非吾志 甘心赴國憂 閑居は吾が志に非ず 甘心國憂に赴かん

この詩は前述したように、古直は太和二年の作としている。それは太和三年に上疏した「求自試表」を参照しても、根據のあることである。それには「輟食、棄餐、奮袂、攘衽、撫劍、東顧而心已馳於吳會矣」と述べられており、いかに彼が外敵の討伐に参加することを欲していたか理解される。しかし、當時の魏朝が一貫してとつてきた、皇族及び外戚を政治の場から隔離するという政策からすれば、彼の數次の上疏は所詮聞き届けられるべくもなかつた。彼のたびたびの上疏には執念さえ感じられ、當然こうした心境は詩にも反映している。そして、彼の志を述べる詩のうち、この詩の「甘心赴國憂」という表現は最も直接的な心情の流露である。彼の政治的志向は、決して觀念だけのものではなかつたことは、以上

で明白である。

△其六▽も敵國討伐の志をいうものである。

飛觀百餘尺 臨牖御櫺軒 飛觀百餘尺 牖に臨みて櫺軒に御る

遠望周千里 朝夕見平原 遠望千里に周く 朝夕平原を見る

烈士多悲心 小人媮自閑 烈士 悲心多く 小人は媮にして自から閑たり

國讎亮不塞 甘心思喪元 國讎亮に塞きず 甘心元を喪ふを思ふ

拊劍西南望 思欲赴太山 劍を拊して西南を望み 思ひて太山に赴かんと欲す

紆急悲聲發 聆我慷慨言 紆急にして悲風發す 我が慷慨の言を聆け

最後の詩を、前述したように、黃節は建安十九年曹操東征のおり、曹植が鄴都にあつて留守を命じられた時の作とするが、内容は△其五▽と極似しているし、「求自試表」と重なる部分が多いことから考えると、それは誤りであつて、古直のいう通り、太和二年頃の作、それも△其五▽とほど遠からぬ時期に作られたものである。起句には「古詩十九首」△其三▽中の「兩宮遙相望、雙闕百餘尺」をふまへながらも、人生の悲哀を斗酒もてはらうなどという態度には結びつけずに、仇敵を倒すという別の展開をみせる。その意志は△其五▽にもまして強いものがあり、國難を自己とかかわるものとして受けとめ、急を救わんとするが、現實には不可能であるという、悲憤やるかたなき心境が、最後の一句に收束しているのである。まさに「聆我慷慨言」というのは、晩年の悲痛な心境とあい呼應して、彼の絶叫であるといわなければならない。

以上、一つ一つの篇に即してみてきた。もとより、この「雜詩六首」は、曹植が自らまとめたのか、文選編集の際、編者が題名の失われたものを一括して「雜詩」と名づけてまとめたのか、判然としないが、全體として見る時にかなりまと

まりをみせている。△其一▽△其二▽は別離と不遇からくる悲哀を、△其三▽△其四▽は幸薄い婦人を、△其五▽△其六▽は敵國擊滅の志をいうように、主題が綿密に計算されたかのようになっているからである。「贈白馬王彪」と比較するに、この作品は前者と違つて連章的な悲哀の描寫を意圖したものではないが、彼の晩年近くの時期の心境を、一貫した慷慨の氣とより深まつた目をもつて、多方面にわたつて披瀝していることが理解されるのである。「贈白馬王彪」が最高傑作の一つだとすると、雜詩六首は制作年代は一部前者と重なるにしても、彼の生涯最後の時期の代表的な作品群であるといえる。さらに繰り返せば、彼の誠實な道德觀に支えられた激しい慷慨の氣を、その晩年に於ける創作活動の中でも失うことなく燃焼させ、また、苦しい境遇の中で、他者を表現上の對象として扱うだけでなく、その境遇を自分の體驗と重ね合わせ、他者の視點を充分に自分のものとすることができたということが、この「雜詩六首」の考察から指摘されるのである。

注

- (1) 雜詩の定義に關しては、一海知義「西晉の詩人張協について」(『中國文學報』第七冊、百十九頁―百二十一頁)に詳しい。
- (2) 余冠英編選「曹操曹丕曹植詩選」でも、たんに「指所懷念的」と解する。
- (3) 「詩有高豪多悲風、朝日照北林、則曹子建之興也」とある。
- (4) 伊藤正文「王粲詩論考」(『中國文學報』第二十冊、三十六頁)に、王粲との關係を示唆する。
- (5) 「全上古三代秦漢三國六朝文」には「自誠令」として載せる。
- (6) 「三國志」本傳、裴松之注に引く「魏略」にみえる。
- (7) 「文選」によつた。丁晏編「曹集鈐評」等は、「朝遊北海岸、夕宿瀛湘沚」に作る。

(大學院修士課程)